２０２４年度

郁文館高等学校　一般試験
郁文館グローバル高等学校　一般試験

国　語

時間５０分・１００点満点

受験上の注意

１．　解答用紙には、受験番号・氏名を記入すること。

２．　解答は、解答用紙の所定のところに記入すること。
記入方法を誤ると得点にならない。

３．　試験終了の合図とともに、解答用紙・問題用紙とも
回収される。

郁文館高等学校
郁文館グローバル高等学校

一　次の文章を読み、後の問に答えよ。

およそ人として社会で生きていくとき、常識はどんな地位にいても必要であり、なくてはならないものである。では、常識とはどのようなものなのだろう。わたしは次のように解釈する。

まず、何かをするときに極端に走らず、頑固でもなく、善悪を見分け、プラス面とマイナス面に敏感で、言葉や行動がすべて中庸にかなうものこそ、常識なのだ。これは学術的に解釈すれば、「智、情、意」の三つがそれぞれバランスを保って、均等に成長したものが完全な常識であろうと考える。さらに言葉を換えるなら、ごく一般的な人情に通じて、世間の考え方を理解し、物事をうまく処理できる能力が常識に外ならない。

人の心を①分析して、「智、情、意」の三つに分類するというのは、心理学者の説に基づくものだが、この三つの調和がいらないという者など誰もいないだろう。知恵と情愛と意志の三つがあってこそ、人間社会で活動ができ、現実に成果をあげていけるものである。ここでは、常識の原則である、智、情、意」の三つについて、すこし述べてみたいと思う。

まず「智」とは、人にとって②どのような働きをするのだろう。人として知恵が充分に発達していないと、物事を見分ける能力に不足してしまう。A、物事の善悪や、プラス面とマイナス面を見抜けないような人では、どれだけ学識があったとしても、よいことをよいと認めたり、プラスになることをプラスだと見抜いて、それを採ることができない。学問が宝の持ち腐れに終わってしまうのだ。この点を思えば、知恵がいかに人生に大切であるかが理解できるだろう。

しかし、「智」ばかりで活動ができるかというと、決してそうではない。そこに「情」というものがうまく入ってこないと、「智」の能力は十分に発揮されなくなってしまう。

たとえば、「智」ばかりが膨れ上がって情愛の薄い人間を想像してみよう。自分の利益のためには、他人を突き飛ばしても、蹴飛ばしても気にしない、そんな風になってしまうのではあるまいか。

もともと知恵が人並み以上に働く人は、何事に対しても、その原因と結果を見抜き、今後どうなるかを見通せるものだ。このような人物に、もし情愛がなければたまったものではない。その見通した結果までの筋道を悪用し、自分がよければそれでよいという形で、どこまでもやり通してしまう。この場合、他人に降りかかってくるァメイワクや痛みなど、何とも思わないほど極端になりかねない。そのバランスの悪さを調和していくのが、「情」なのだ。

「情」は一瞬のィ緩和剤で、何事もこの「情」が加わることによってバランスを保ち、人生の出来事に円満な解決を与えてくれるのである。もしも人間の世界から「情」という要素を除いてしまったら、どうなるだろう。何事も極端から極端に走って、ついにはどうしようもない結果を招いてしまうに違いない。だからこそ、人間にとって「情」はなくてはならない機能なのだ。

しかし、「情」にも③欠点があって、それは瞬間的にわきあがりやすいため、悪くすると

流されてしまうことだ。特に、人の喜び、怒り、哀しみ、楽しみ、愛しさ、憎しみ、欲望といった七つの感情は、その引きおこす変化が激しいため、心の他の個所を使ってこれらをコントロールしていかなければ、感情に走り過ぎるという弊害を招いてしまう。この時点で「意志」というものの必要性が生じてくるのである。

動きやすい感情をコントロールするものは、強い意志より他にはない。だからこそ、「意」は精神活動の大本ともいえるものだ。強い意志さえあれば、人生において大きな強みを持つことになる。B 意志ばかり強くて、他の「情」や「智」がともなわないと、単なる頑固者や強情者になってしまう。ウコンキョなく自信ばかり持って、自分の主張が間違っていても直そうとせず、ひたすら我を押し通そうとする。

もちろん、こんなタイプも、ある意味から見れば尊重すべき点がないでもない。しかし、それでは一般社会で生きる資格にかけ、精神的に問題があって完全な人とはいえないのだ。強い意志のうえに、聡明な知恵を持ち、これを情愛で調節する。さらに三つをバランスよく配合して、大きく成長させていってこそ、初めて完全な常識となるのである。

現代の人は、よく口癖のように「意志を強く持て」という。しかし意志ばかり強くてもやはり困るものでしかない。俗にいう「猪武者」のような人間になっては、どんなに意志が強くても社会で役に立つ人物とはいえないのである。

物事に対して、「こうすべきだ」「こうすべきでない」と是非の判断基準をはっきり持っているものは、すぐにでも常識的な判断をくだすことができる。でも、場合によっては、そう単純に割り切れないこともある。

たとえば、誰が見ても正しい道理を押したてられて、言葉巧みに誘導されると、知らず知らずのうちに、自分の日頃の主義主張とは正反対の方向に誘導され、足を踏み入れてしまうような羽目になる。こんな場合は、無意識のうちに自分の本心をなくされてしまうわけだが、こんな状況に直面しても、頭を冷静に保って最後まで自分を見失わないようにすることが、「意志のエ鍛錬」の重要な働きなのだ。

こんな場面に陥ったなら、相手の言葉に対して、常識に照らし合わせながら自問自答してみるとよい。こうすると、「相手の言葉に従うと、一時は利益を得られるが、あとで不利益が起こってくる」といったことが、はっきりとわかってくるものである。もし目の前の出来事に対してこのような心の中の検討が加えられるなら、自分の本心を思い出すことはとても簡単だろう。その結果、正しいことを選び、間違ったことから遠ざかることができる。わたしは以上のようなやり方こそ「意志の鍛錬」だと思うのである。

しかし一口に「意志の鍛錬」とはいっても、それには善悪の二種類がある。たとえば石川五右衛門のような人物は、悪い言い方の「意志の鍛錬」を積んできたため、悪事のためには並外れて意志が固かった男といってよいだろう。誤った方法で「意志の鍛錬」をしていくと、最悪④石川五右衛門のような人間を出してしまわないとも限らないのだ。

C 、「意志の鍛錬」の目標は、常識に照らし合わせつつ実践していくことになる。こうして鍛錬した心で、物事に臨み、人に接するなら、社会を生きていくうえで過ちを犯す

こともなくなるだろう。

このように論じていくと、「意志の鍛錬」には常識が必要である、ということになってくる。常識の養成には親や目上を大切にし、良心的で信頼されることが必要であろう。特に良心的であることと親を大切にする気持ち、この二つから組み立てた意志を持って、何事も順序良くオシンテンさせ、静かな気持ちでじっくり考えてから決断することだ。こうすれば「意志の鍛錬」にはスキがなくなっていくのである。普段から鍛錬しておけば、ついにはそれが習い性となって、どんなことにも動じない気持ちを持つに至るのである。

（渋沢栄一『論語と算段』より）

注　石川五右衛門…安土桃山時代の盗賊で、釜茹でによって処刑された人物。

問一　波線部ア～オについて、カタカナのものは漢字に改め、漢字のものは平仮名でその読みを答えよ。

問二　空欄 A ～ C にあてはまる接続詞として適切なものを次の中からそれぞれ選び、記号で答えよ。

ア　だからこそ　　イ　しかし　　ウ　さて　　エ　なぜなら　　オ　たとえば

問三　傍線部①「分析」について、この言葉の対義語を漢字で答えよ。

問四　傍線部②「どのような働きをするのだろう」について、この働きを行うことができると、どのような人になるのか。「～人になる」という形に続くように、四十字以内で述べよ。

問五　傍線部③「欠点」とあるが、これを克服できない人について、どのように結論づけているか。三十五字以内で抜き出し、最初の五字を答えよ。

問六　本文において述べられている「常識」の説明の内容として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　常識を育む上では、自分の利益だけで物事を判断しないということが最も重要である。

イ　どのような状況に直面しても、頭を冷静に保って最後まで自分を見失わないようにすることが重要な働きである。

ウ　意志を強く持ち、知恵を加え、情愛で調整することをバランスよく持ち成長してこそ、完全な常識となる。

エ　七つの感情をコントロールしなければ、感情に走るという弊害を招く結果を生み出してしまう。

問七　傍線部④「石川五右衛門のような人間」のような行動として当てはまるものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　人のことを想い、考え行動すること。
イ　人のものを盗むような行動をすること。
ウ　自分のために心の弱い部分を鍛えること。
エ　どんな困難が訪れようとも、善行のために努力をすること。

問八　本文の内容として間違っているものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　言葉巧みに誘導されると、自身の考えとは異なった考えに流されてしまうこともある。
イ　何事においても意志が強いということは大切なことであり、他の要素が弱かったとしても、意志が強ければうまくいくのである。
ウ　動きやすい感情をコントロールするためには強い意志が必要であり、そのためには善とされる意志の鍛錬が必要不可欠である。
エ　「智、情、意」の三項目においても、それぞれに気を付けるべき欠点といえる点が存在する。

問九　本文の内容を読んだふたりが次のような会話をしている。次の空欄部Xに当てはまる内容を、本文の内容を踏まえて五十字以内で述べよ。

A：極端に走ることはよくない事態を生み出す可能性があることが読んで分かったよ。
B：そうだね。判断する上でも善悪の判断を行うことが重要だよね。
A：どうしても損得で考えてしまうこともあるけど、これからの行動を見直す必要性があるよね。
B：自分のことを振り返ってみると、善悪でなく損得で判断する「間違った判断」をすることがあったように思う。
A：私もあった。［X］のような行動は間違っていたと今では反省できるよ。
B：これからは善悪の判断を大切にしていこうね。

二　次の文章を読み、後の問に答えよ。

翌日。おじいさんの家の網戸はとりはずされ、大きな窓が開け放たれている。奥には小さな祭壇、白い菊の花、その部屋に置くにはなんだか異様に大きく思えるお棺……。

地方からやって来た、おじいさんのおにいさんの息子という人が、町内会の人たちと縁側にぼんやり座りこんでいる。近所のおばさんが三、四人ずつかたまって、庭でひそひそしゃべっている。黒い服が暑くてたまらないというように扇子やハンカチをひらひらさせ、足もとに寄ってくる蚊をはらいのけるたびにコスモスを踏みつけているのだが、だれひとり気にとめる様子もない。やがて、三十分遅刻したお坊さんがお経をあげ、あわただしくお線香をすますと、お棺のふたが開けられる。おじいさんは信じられないほど小さくこわばって、ぼくは「見たくない」と思う。「これはおじいさんじゃない」と思う。河辺と山下が泣きだす。僕も泣きだす。でも、すべてがぼんやりとしたァ膜におおわれているみたいだった。泣いているぼくとは別のもうひとりのぼくが、眠りこんでいるような感じなのだ。

知らないおじさんの車で火葬場につくと、大きな鉄の扉が待っていたようにごとりと開き、おじいさんを飲みこんでしまった。①すみやかに、なめらかなレールに乗せて。

「カエル、買って来てよかった」合宿のおみやげのカエルのぬいぐるみを、河辺はお棺の中に入れたのだ。

「煙、ほんとにちょっとしか出ないね」

「うん」

ベンチに腰掛けて火葬場の煙突を見上げながら、ふと、今日がすごく暑いということに気づいた。ほんとうに暑い。まるで去りかけていた今年の夏を、もう一度呼び戻したみたいに。

「ちょっと、きみたち」黒いネクタイの襟元をゆるめながら、おじいさんのおにいさんの息子だというおじさんが近づいて来た。「ちょっと聞きたいことがあるんだがね」おじさんはぼくたちをつめさせるとベンチに腰を下ろした。「叔父のことなんだけれど」

それがおじいさんのことだとわかるのに、ぼくは数秒かかった。この人は、おじいさんの甥だというのに、全然似てもいなければ、②おじいさんが死んでもうれしくも悲しくもないという顔をしている。

「叔父がね、ある女の人に、お金をのこしているんだ」

ぼくたちは顔を見合わせた。古香弥生さんに違いない。

「まったく、けっこうためこんでるのには驚いたよ」おじさんは、鼻の頭の汗を拭きながら言った。ハンカチは、趣味の悪いチェックのィモヨウだ。こんな日くらい、白いハンカチを持って来ればいいのに。「それで、その女の人の居所を、きみたちに聞いてくれって叔父は書いてるんだ」

「何か、手紙か何か、あったんですが」③河辺が勢いこんでたずねた。

「そう」おじさんはおもしろくなさそうに答えた。「いつか自分が死んだら、きみたちのうちの誰かに必ず連絡してくれって書いてあった」

それを聞くとぼくたちは打ちのめされた。
「オレが悪いんだよ。オレが、死んだ人を見たいなんて気を起こすから……」河辺が鼻声を出した。
「泣くなよ」ぼくは煙突を見上げた。おじいさんなら言うだろう。泣くな、と。けれども河辺は激しく泣きだしてしまった。
「三人名前が書いてあったけど、最初はきみたちだとは思わなかった。だってまさか」
「［A］」ぼくはそう言っておじさんをふりかえった。
「ま、そうだね」おじさんは、少しどぎまぎした様子で立ち上がると、「だれもいなかったんだね。まあ、勝手なことばっかりしてたんだから」と言い捨てて行ってしまった。
煙突の先の白い煙は、空の青さに溶けるように消えていく。ぐっと目を開き、そのぼんやりとした煙をにらむ。すると、それは上空の風に吹かれて、気分よさそうにかすかに揺れた。ぼくはしっかりと見届けなくてはならない。最後まで、決して目をそらしてはならない。

おじいさんの骨のかけらはまっ白で、平らなものもあれば、曲がったのや、貝の化石みたいなものもあった。ふたりひと組で、お箸で骨壺に入れる。河辺とぼくが、そっと、おそるおそる持ち上げたのは、蘭の花の芯のような形をしていた。葬儀屋さんが「これは喉のところの骨です。こういう形がきれいに残っているのは、ありがたいことですよ」と教えてくれた。河辺も山下もぼくも、神妙にかしこまって葬儀屋さんの言うことを聞いていた。もうおじいさんは、ぼくたちの手の届かないところにいってしまった。ぼくはおじいさんの骨を見て初めて、もしかしたらおじいさんが生きかえるかもしれないと心のどこかで思っていたことに気づいた。でも、そんなことはもうないとわかった今、ぼくの心はプシギなほど静かで、素直な気持ちに充たされていた。
もし、もっとおじいさんが生きていてくれたら、ぼくはいろいろなことをおじいさんに話せたし、時には相談にだって乗ってもらえただろう。受験はすごく不安だし、自分が将来何になりたいのかも全然わからない、そういう悩みなんかを聞いてもらいたかった。夏になったら、またいっしょにすいかを食べたり、花火だって上げてくれたかもしれない。ぼくが大人になったら、いつかのようにいっしょにお好み焼き屋でビールを飲むことだってできただろう。そうすることができないのは、すごくさびしい。心細い。だけどそれは、結局はぼくの問題なのだ。おじいさんは、充分、エリッパに生きたのだ。おじいさんの白い骨が、ぼくにそう教えてくれている。ほんとうに、めいっぱい生きたのだ、と。ぼくもがんばるよ。心の中で、おじいさんに話しかけていた。
やがて乾いた音がして陶器の骨壺のふたが閉められると、④僕たちの夏休みが終わった。
「今日、塾は休む。いいな」十月最初の木曜日、昼休みに河辺が言った。「いよいよ明日から、はじまるらしい」

山下とぼくは黙ってうなずいた。

放課後、ぼくたちはおじいさんの家に集合した。コスモスが庭いっぱいに咲いている。背も低く、花も小ぶりだけれど、雑草の中でそいつらは小さな火が燃えているようだ。

「ここ、どうなっちゃうの」山下は、しまった雨戸をそっとなでている。「マンションかなんか建つのかなあ」

玄関の扉も鍵がかかっていた。ノブが砂ぼこりでざらざらする。河辺は黙ったまま庭をぶらついていたかと思うと、急に。たんとしゃがみこみ、せっせと貧乏ゆすりをはじめた。

明日から、この家のとり壊しがはじまる。ほんの一か月ほど人が住んでいなかっただけで、家はずいぶん荒れた感じになってしまった。緑色の雨どいも、ベージュの板壁も、みんなくすんでいる。ぼくは洗濯物のロープがなくなっているのに気づいた。お葬式の日にも、なかっただろうか……。

それからぼくたちは黙ってコスモスをつみ、庭をあとにした。玄関のところで、山下はふりかえり、端の欠けた敷石をじっと見ている。いつか山下がお刺身を置いた、あの敷石だ。

「行くぞ」河辺はコスモスの束に顔を突っこむようにして、ずんずん歩いて行ってしまった。「オレ、心配なんだ」山下が言った。「この家のこと、忘れちゃうんじゃないかって思うと」

⑤それはぼくも同じだった。自分の部屋で、おじいさんのことを思い出そうとする。すると、思い出そうとすればするほど、いろいろなことが抜け落ちていくみたいな気がして、いても立ってもいられないような気持ちになるのだ。

「だからこの［B］だけは、絶対覚えてようって思う。オレ、頭悪いけど、ひとつくらいなら覚えてられると思うんだ」

ぼくは涙が出るほど強く目を閉じる。まぶたの裏に光がオ点滅し、それからぱっと目を開く。すると、玄関の扉を開けて顔をのぞかせたおじいさんが一瞬見えた。ばこん、という扉の開く音まで聞こえた。

「この花、自分の部屋に飾るんだ」ぼくはそう言って、鍵のかかったままの扉に背を向けると歩きはじめた。

「オレも。机の上に飾る」

「それでもっと勉強する」

「そうだな。やらなきゃな」

いやだいやだと思っていた気持ちは、もうすっかり吹っきれていた。ぼくは毎日、おなかをすかせた動物みたいに問題集に食いついていた。受験はもうすぐなのだ。

（湯本香樹実『夏の庭』より）

問一　波線部ア～オについて、カタカナのものは漢字に改め、漢字のものは平仮名でその読みを答えよ。

問二　傍線部①「すみやかに、なめらかなレールに乗せて」とあるが、この場面描写からどのようなことが読み取れるか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　お葬式の最初はお坊さんが遅刻してきたが、その後は順調に事が進み、「ぼく」は安心しているさまを表現している。

イ　「ぼく」は別れを惜しむ気持ちがあるが、その気持ちとは裏腹に事が順調に進む残念さを表現している。

ウ　眠り込んでいるようなおじいさんを、起こさないように物事が進んでいくさまを表現している。

エ　お葬式が始まった当初はこわばっていたが、時間が経つにつれて恐怖心がなくなっていくさまを表現している。

問三　傍線部②「おじいさんが死んでもうれしくも悲しくもないという顔」から読み取れる心情として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　そこまで興味がない　　イ　放心状態にある　　ウ　内心では悲しい

エ　後悔している

問四　傍線部③『河辺が勢いこんでたずねた』とあるが、その理由を五十字以内で答えよ。

問五　空欄部 A に当てはまる台詞の内容として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　こんな早く見つかると思わなかった

イ　こんな知っていると思わなかった

ウ　こんな子どもだとは思わなかった

エ　こんな近くにいると思わなかった

問六　傍線部④「僕たちの夏休みが終わった」についての説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えよ。

ア　楽しみにしていた夏休みがようやく終わり、これから来る学校のことを考えると「ぼく」の気持ちが沈む様子を表している。

イ　おじいさんの死というものを受け入れ、気持ちの整理を行い、「ぼく」が次へ向けての一歩を踏み出そうとしていることを表している。

ウ　なぜおじいさんが死んでしまう必要があったのかは分からないが、死を見届けるということを行い、「ぼく」のひとつ目標を達成したことを表している。

エ　人の死を見届けるという大役を終えたことで気持ちが軽くなり、これから始まる学校生活へ「ぼく」が気持ちを切り替えたことを表している。

問七　傍線部⑤「それはぼくも同じだった」とあるが、そのように「ぼく」が考える理由を三十五字以内で答えよ。

問八　空欄部 B に当てはまるものを本文中から七字で抜き出し答えよ。

一

問一
ア
イ
ウ
エ
オ

問二
A
B
C

問三

問四

問五

問六

問七

問八

問九

二

問一
ア
イ
ウ
エ
オ

問二

問三

問四

問五

問六

問七

問八

受験番号

氏名

郁文館高等学校・グローバル高等学校　一般試験